

豆田町並み通信

第35号

発行者
豆田町伝
建保存会
23年3月

流し雛行事に 雨中でも全国より！ 主催 豆田観光協議会

天領おひなまつりの恒例の行事となつた「流し雛」行事が、三月六日（日）桂林荘公園内の特設ステージで行なわれました。

この日は朝から生憎の雨模様で、用意されていた野点と琴の演奏は取り止めになりましたが、豆田を訪れた観光客や地元の方々が約四〇〇名が「流し雛」行事を楽しみました。

多くの子供たちも「大きくなりますように」「算数で一〇〇点がとれますように」「琴が上手くなって来年は雛祭り演奏をしたい」などの願いを込めて、紙雛を流していました。



新一年生も新しい学校生活に願いを込めて



和装グループの皆さんも華を添えて！

また、カナダから観光で豆田町へ来た三人組の皆さんは「日本のめずらしい風習を体験できて非常にラッキーです」と語り、お土産として流し用の紙雛人形を持ち帰りました。

主催の豆田観光協議会の武内事務局長は「今年で六回目になり定着した行事になって来た。今回は雨で残念だったが今後も皆さんに喜ばれる参加型行事として充実した行事にしてゆきたい」と語っていました。

咸宜園を世界遺産に！

（推進講演会開催）

二月二十八日（月）、パトリアにて咸宜園の世界遺産登録に向けた講演会が開催されました。

講演会では日田市出身で咸宜園教育研究センター名誉館長でもある後藤宗俊別府大学名誉教授が講師として、石見銀山が世界遺産に登録された事例をあげて、咸宜園の世界遺産への登録の意義や可能性について言及されました。

後藤先生は、石見銀山世界遺産登録は大森地区の町おこしの活動の延長上に達成したものであり、咸宜園もそれ単独でなく現在進められている豆田や隣の町おこしと関連づけることの必要性を説かれました。



咸宜園の歴史的役割を講演する後藤先生

淡窓が生きていた当時の日田は咸宜園を支えた町（並み）と教育実践となつた自然が良く残されており、近世の日本でも稀有な「学園都市」であり、今後は咸宜園を中核として、半径1km内の範囲内にある文化遺産を保護・活用しながら咸宜園と関連付けていく事が世界遺産登録に向けて大事な活動であると述べました。

市民応援団を募集中！

咸宜教育研究センターでは、咸宜園が「近世日本の学問・教育遺産群」として、世界文化遺産に登録されるよう支援していただく「市民応援団」を募集しています。

応募頂くと、咸宜園平成門下生として世界文化遺産登録について学ぶほか、豆田町の遊学、咸宜園の日課表による合宿などを通して、咸宜園、広瀬淡窓、その門下生について学んでいきます。

詳しくは左記にお問合せ下さい。

咸宜園教育研究センター

（咸宜園内）

Tel・fax 22・0268

防火訓練を実施！

一月二十六日（水）、文化財防火デーに合わせて、豆田町伝建保存会主催の防火訓練が、地元住民・豆田消防団・行政関係者など六十名が参加して行なわれました。

この訓練では豆田の辻公園で煙草の不始末による火災が発生したとの想定のもと、消防署への通報、観光客の避難誘導、初期消火などの訓練が行なわれました。

訓練後、一昨年設置した屋外消火栓の使用方法や、本年六月に設置が義務付けられる住宅用火災報知器の設置について日田消防署より説明がありました。

昨年十月に港町公民館で不審火による火災が発生しており、参加者は初期消火の大切さを感じていました。



夫々の役割を分担して訓練する住民

由布市湯の坪街道の町づくりを学ぶ！

一月二十七日（木）、地元住民約三十名が参加して、旧古賀医院座敷にて「町づくりと景観協定」をテーマに講演会が開催されました。

講演会では、由布市都市景観係の佐藤洋造主任が景観協定の内容について、湯の坪景観運営委員会会長の太田洋一郎氏がこれまでの町づくりについてそれぞれ説明が行われました。

特に太田氏は「平成十一年に起きた交通事故をきっかけに安全で快適な町づくりをする必要性に目覚めた」「誰もが参加出来るよう八割の方が守れる規定を基本に景観協定を定めた」と経過報告を行ないました。

スライドではゴテゴテした看板を出していた食堂や土産品店が協定締結後すっきりした店構えになった事例が紹介され、その後のお客さんの出入りも増加した事が報告されました。

店先を五十センチ程空ける、緑化に務める、ケバケバしい照明広告は出さない等を定めた「商い協定」には九十六店舗のうち八十一店が締結しており、豆田の店も見習う事の多い講演会でした。



熱心に聴講する参加者

熊本市古町自治協 豆田町を視察！

報告する佐藤、
太田の両講師



二月二十五日（金）熊本市の古町校区自治会協議会（喜津木博会長）十一名の一行が豆田町の町づくりを視察するために訪れました。

古町は熊本駅に近く古い町並みが残る地域で、今回九州新幹線の開通を契機に町の活性化を図る事を目的に訪れ、保存会より木下副会長と赤司事務局長が対応しました。

保存会より、町に残っている伝統や文化を大切に保存活用するところから豆田の町づくりが始まったと説明しました。

喜津木会長は、地元で視察結果を持って帰り活性化に向けた取り組みを始めたいと語っていました



豆田の取組みに質問する古町の皆さん

源兵衛稻荷で初午祭！

二月八日（火）、広瀬宗家所有の源兵衛稻荷の初午祭が地区住民二十名が参加して行なわれました。

神官より「この稻荷様はこの三百年間、豆田を見守ってきた神様です。今後も皆さんの手で守り、豆田の隆盛の礎にして下さい」と述べました。



お参りをする豆田の皆さん